

附 3
3406
卷

本朝奇跡談全

皇都書林

菊林子

日新堂

二月二十三日
求

本朝奇跡談叙

大皇六年夏五月甲子天下

詔々畿内七道諸國の郡郷乃名

好文字以著其郡の物産銀銅彩色

草木禽獸虫魚具色目を録し

地の汝濱國郡山川魚野由來

又台老乃相傳舊聞異事竹帛以載

言上之所謂風土記是也



醍醐天皇延長三年十二月ノ至ル其ノ春
數百卷全ク備ル且レ民部省圖帳及ヒ
国府記海外國記兩京新記ト相繼テ
成ル實ニ經國の大美千載ハ英事也
王室中葉微シ風土記の類ハ多ク混
亡シ歎ム於テ於テ慶長以來泰
平數百年文物隆盛ニ於テ
皇朝の載藉四方ニ輯ル国字好事の

徒ハ亦モ競ヒ紀述故ハ近世地理の書一二
出ツ豈嘉賞ヲ多ク得ル頃京師の書林
邑上氏奇跡談ノ物と袖ト未ダ也
余ハ亦モ之ノ添削と得ル梓ノ上ニ見ル事
乞フ其書ヲらシ人ノ思ハん各國の神廟靈窟名
山大川勝景佳境戰迹古墳等先輩の
未述ス所也寔ニ輿地の正史トナリ也
然レも事ハ公ノ好ムの多ク

悉く世より行ひし。此を終る。不佞自ら
 黙々此般の文を省きたる。本末を正
 其際便を巻端に書し以之を贈
 以歸

安永三年午清明日

東都牛隱竹叢高尚採毫於洛陽
 錦城寓



本朝奇跡談目録

卷之上

大和國 芳野山採附小杉紙 興福

寺附大佛 金剛山 多田峯

十津川千本鎗附雜魚寢

伊勢國 猪草淵 惡路津火

捨橋

志摩國 鸚鵡石

武藏國 青梅 輕衫 相生松

七色梅 附 三股竹

伊賀國 うに 附 崎 并 雲母

大杉

甲斐國 身延山 奈良田村掛橋

附 檜柳子水 鹽井 富士山

駿河國 富士人穴 上田村鉤橋

常陸國 常陸帶 附 要石

尾張國 天王祭

卷之中

伊豆國 山蛭 并 水晶石

遠江國 阿部茶

下野國 神子石 并 石 華嚴灘

殺生石 這松 附 龍頭灘

下總國 四季櫻

近江國 都子

紀伊國 牟婁大石 并 秀衡櫻

唐畧 并 濱木綿 道成寺舊跡

高野山 附 肉桂大木

淡路國

并天浮橋

天地大明神

蘆原國舊跡

河波國

一の宮古城

鳴渡

田中窪村釣橋

土佐國

并産物

響箭

小馬

吸口

伊豫國

讃岐國

附次信の碑

日平家蟹

穂沖山

大寶寺

金毘羅

屋嶋觀音

志度寺

信濃國

并木曾棧

附田毎月

鶴

寢覺床

姨棄山

高月輪

飛騨國

卷々下本

深山幽谷

籠る液

越中國

越後國

須類

并鞋

立山権現

草生水

地中の火

附鶴島

陸奥國

鬼窟 おにがいろ

秀徳 ひせのり

附 高館古跡 たかたねのこせき 松島

金花山

附 法竈 ほのぼ 日野田玉河

多賀城古跡 たがのこせき

附 壺石碑 つぼのいし 戸絶橋 とつたの

附 十着管薦 じゅうしやくのすゐ

宮城野 名取川

国見山

附 伊達大城戸 いたての 日下級園 ひしたのせき

日美経腰掛 ひみけのこし

辯慶石 べんけい 附 鬼く齒 おにのくは

日千曳石 ひちのひ

佐藤莊司古城 さとうの 附 次信忠信之墓 つぎのぶねの

文字掇石 もじの 附 山々井

阿武隈川 あぶくま

附 白河関

卷之下 未

出羽國

石鏡 いしかがみ

島海山 しまうみ

象沼 さやま

湯殿山 ゆどの

附 羽黒山 はねくろ 日 寂上川 しやくじやう

奥羽米銭 おくのほろ

丹後國

大江山 おほやま

附 千文龍 ちもん 日 池之奥 いけのおく

日 鬼城 おに

山莊古跡 さんじやう

諸国 山中風俗 しよこく

以上

本朝奇跡談

卷之上

大和國芳野山拾同半畝本堂南向也本堂秋迎長ク臥丈六

尺。尤に弥勒長ク臥丈臥尺。右丈一尺九寸手觀音長ク

臥丈四尺五寸。此寺御朱印千指之石有。右手

芳野櫻つゆのな名木の寄生マツノミ有。此寄生ツル以來

寄生キセと名付と賣ウり。満山マンザン櫻ツル多シ。

二三抱ウる古木コキ取トり數カ志シる所。芳野フノ續ツ所ト

直根上人チクネン參マり。芳野山フノの内ウチに芳野名

行とりの茶竹沢由原。長瀬村より吉中へ杉
極上紙敷出給

○南都興福寺。喜保の初焼失をとり。此路に
丁口方行よるゆり。前々徳波の池有。此丁口
池有。此池芝化して毎年二月薪の能なり。
春日大明神 御朱印此方お名余と云。此
三ヶ前有。山内 東約八里余
南約五里余 御朱印の表よりありと
ふ。御免の鹿多し。若菜山。東大寺。山内。二月
堂。大仏堂。御朱印此方お名余と云。此

堅形七言の天
横形七言 高サ 砂抜お言大佛の長ケ六丈

○同國金剛山 御朱印お名余と云。寶基菩薩
あり。役の優婆塞三國傳来の古沢以て是
と作ると云。長五尺三寸五眼六臂也。耕作の
池と云。此山桔梗の名物として。薬店として上
品と令別山桔梗と云。此山桔梗は山よ基
稀と
○同國多武峯 御朱印此方お名余と云。坊
舎は拾部ヶ所有。此社の録足大明神也

○同國大峰 希鬼山 後鬼山と云。此所より二夜

旅宿す。道路物凍り地なり。往古より此

傳り所の希鬼後鬼と云。昔者も此所にて女人

の名 不動 綱助 中邑 將監、ち子の名は鬼童鬼態なりと云。

けむ大親子兄弟を撰りて婚姻するなりと云り

○同國雲母出る所よきと云。又同國十津川

あか澁の百姓居住す。別所より 御朱印

系。並長サ指九里程横ニ里程有と云。田畑山

林有。此所の百姓は少頭あり。澁千心助。澁千

挺弓千張。今に在。御上洛の節。二條 御城の御

京法門に相造ると云。其前ハ鹿の皮千枚献

せりし。又巡見 ぎんけん 其所へ子穢を

而して。彼少頭ありの武具悉百姓に抽出。行別

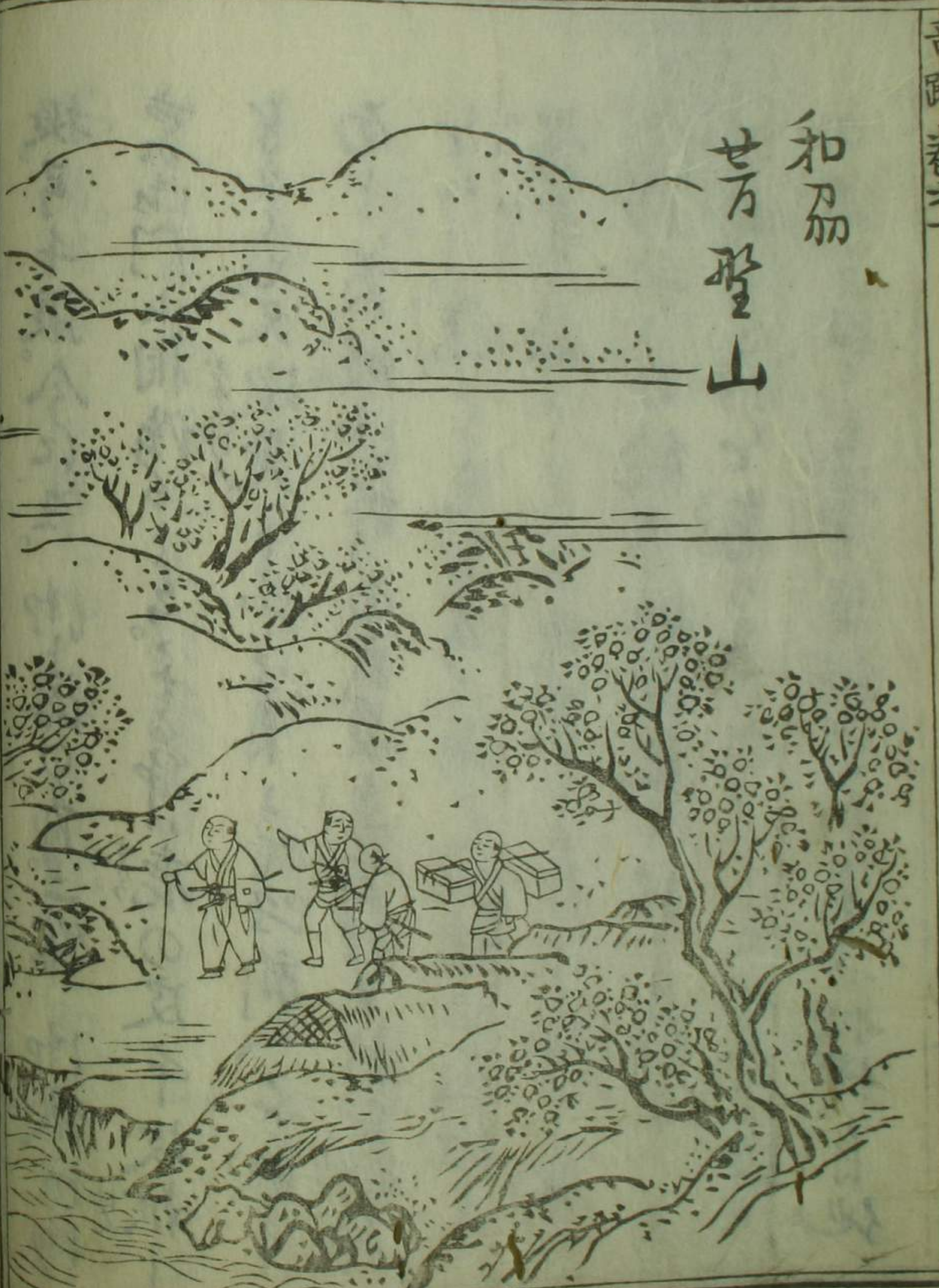
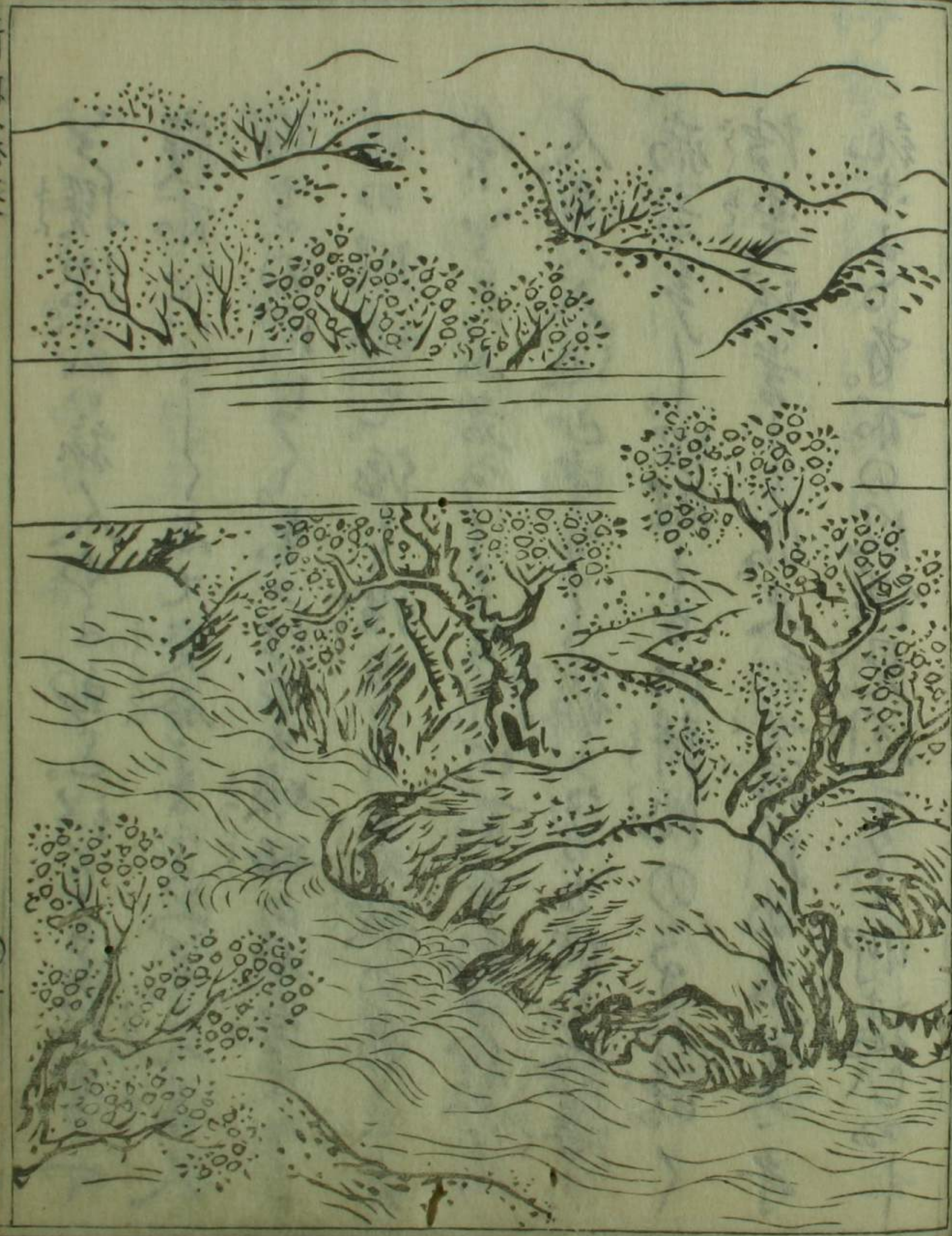
と云。情 つん 氣と送る。昔より此所の風俗を

農業 ふい 出ると云。又親類 しん 其所系合の席へ

も。少頭ありの澁弓銃炮。鎧も持系傍り。並

行時 しん 此所を急ぐ事ありと云。又十津川

のさくらねと云。事有村中の妻不奴僕自他



和加
世乃聖山

嘉
和
卷
之
一

非
一

と撰治。或は旅人およむと。行くべきに男女
寝所を同じくして交會するも。えん來人
目方の圓らく。是のほら。嬖妬の公堂なりき
雨の風俗。遠く往古より多歌のあり。男
命と夫ふ若き。とき雨多節大坂より
人多入込。山中より。振うる土地。瘡毒の
病者多し。は耐もに耕作のさうハ疎く
地変式常と。大和十津川の名ハ太平
純ホも有。雨の風俗見聞。下は柳遠ひる。

伊勢國。純列御領内。田丸領。同村乃内。唐子谷
と。前に播磨洞と。大洲。常の通路。不
幅拾貫斗の川有。其とに杉丸を。水一
往來も。水より橋志。中拾貫斗も。水は
海。雨の。を。危。さ。り。云。終。り。橋。の。り。は
青。く。く。潤。う。く。く。と。底。と。あ。り。山
蛭。と。出。り。く。く。と。人。と。悩。も。壁。風。と
云。虫。多。く。是。又。方。に。雨。分。害。以。り。甚。く。は。是
下。品。の。他。し。男。女。の。形。状。足。ら。く。を。終。り。柳。遠

細々と歩むをいふるもの多し

○同國より豊後津の火とて毎夜に燃ゆ

し。此灯のこゝに燈臺あり。此火は行違ふ

時ハ流行病と云ふ病あり。依て此火は行

むの時ハ下るる地ハ伏せ。其火とて伏

通路よりよろろ。此病はと通るるといふを

○同國より豊後津宮村に槍橋と云ふあり。槍の

木より槍乃葉出り也。其ハ此村の橋は槍の葉

交り出り。弘法大師槍を橋とて造りしと云

傳りし。此の名ハ傳り。彼橋あり村ハ東

○海道石薬師の驛とて古宮程江戸の方へ来

れり。其村ハ此の所に在

志摩國を相領。其村ハ新橋村ハ此村ハ鴨

鷗石と云ふ石あり。此の石ハ淨瑠璃と

云ふ。其味線と云ふ物の名。其石ハ彼石と

云ふ。其音と云ふ。其音ハ編ハ鴨鷗乃

と云ふ。此ハ勢別宮川の上。此ハ野村と云ふ

村ハ鴨鷗石と云ふ。其石ハ唐古と云ふ。其石ハ

○同玉丹生村。此處辰砂と西出せし穴あり。砂は百年斗前と製し出せし也。依く此處より

輕粉と今又製し出せし

武藏國青梅村。此處は青梅山金剛寺 御朱印

即指す。右に寺に梅の木を多梅絶す。口香あり。わり。別は此の町にて多梅。并上田橋納税賣

市場也。一ヶ月は六夜つてありと云

○同玉多摩郡。川村外此知行所宮本村は相生の香あり。雄松維松ともに高々七官能あり

○同玉於賀郡。安藤老口御知行所小午村裏貞寺に

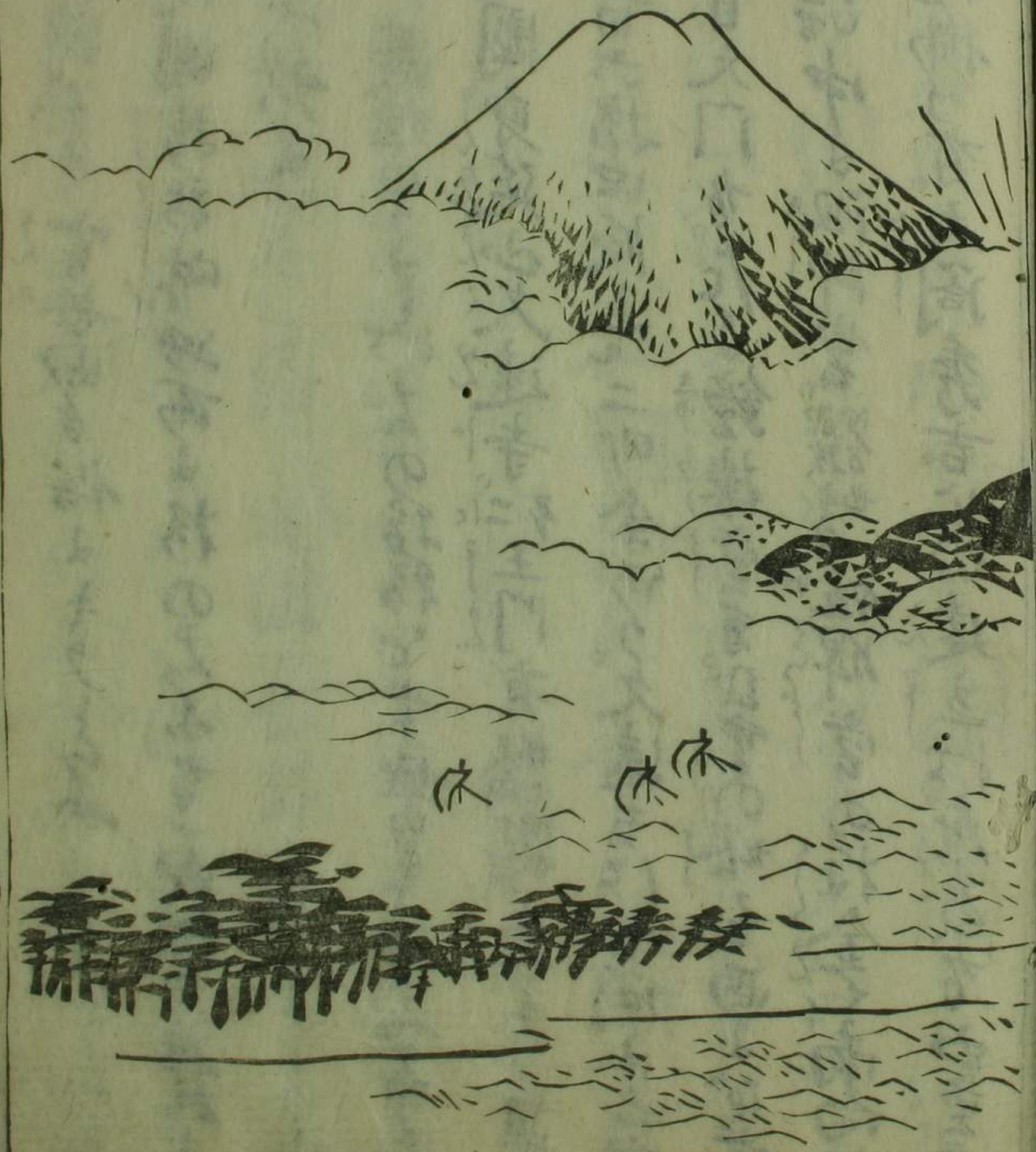
七色咲の梅有。此處安西老口御知行所芝村は三股竹有。是ハ御用より

伊賀國河津郡菟繩子村。津領此處の村ありて

うこともこの地より出らば。常は極多の土と証か

く常の薪とあり。上下のふもく上のうにハ推貫目よ竹價百錢。下のうにハ総うにと云く。讀七八指銅と云。又同玉古中と云。赤く光る石の極多の土と出せ。是を燒く。白烟の甚しと云。又

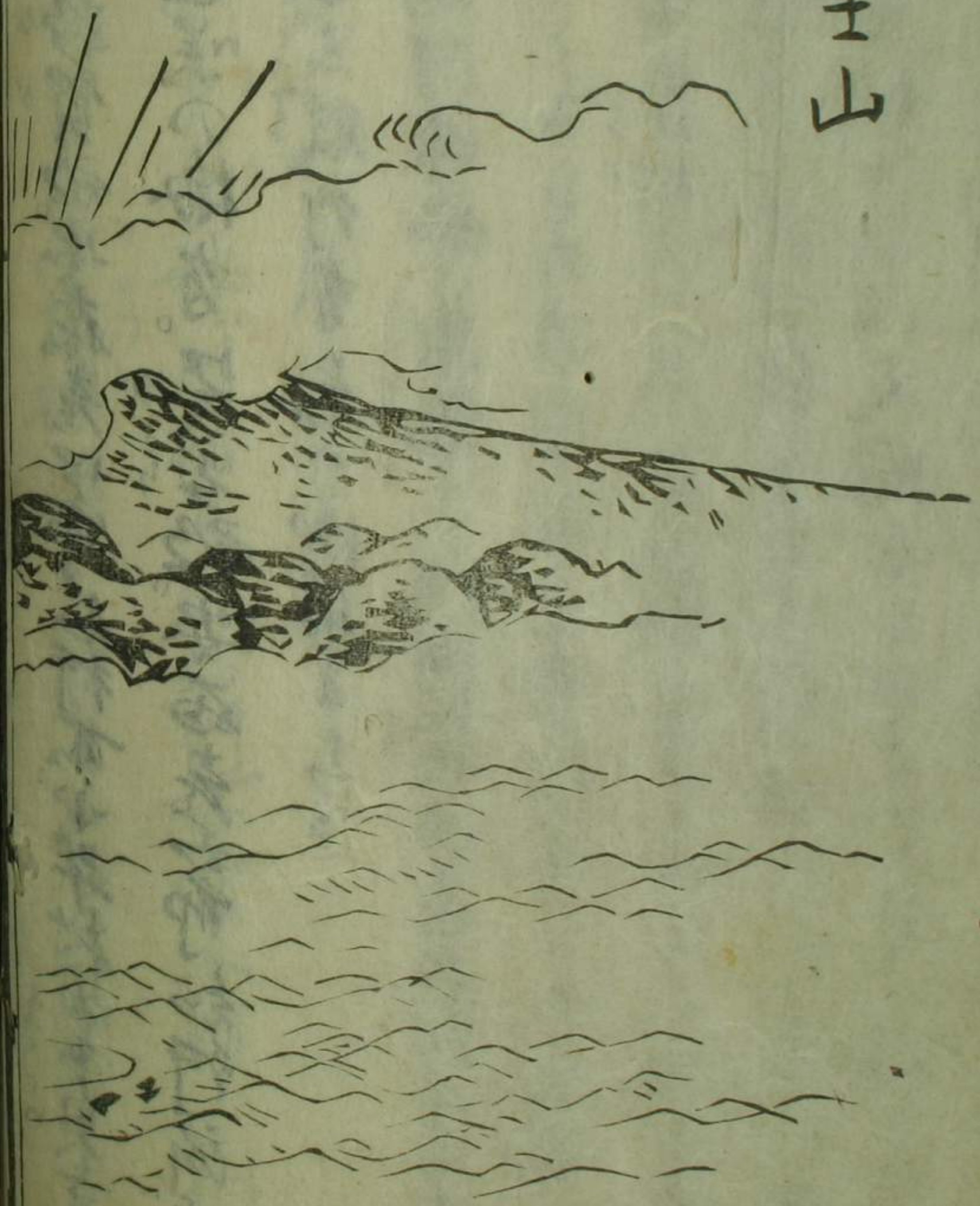
奇跡卷之二



花

駿列
富士山

奇跡卷之二



花

は國々々々雲母出日倍々キラキラ

○同國指折時以而之折の大本有義經の指折と
上歌よ

義經のうらまへその指折と掌盤の色よまきつ了終此

甲斐國身延山久遠寺仁王門有表同十三間
横七間也夫より石段

三百六拾口版上二所余あり久遠寺に七間よ二宮

の日天門有たよ鐘樓堂者即重の塔を西よ本堂

指二宮
四方中よ祖師堂即指堂
也位牌堂の柱金毛南向に

指拂有大同秀吉公の建立は座敷有む重の

塔有。此所奥の院也。本寺後向の淨院と云。淨院

の南よ証鼓を夫四方程有撞木も有。身延の所上

品の所也。此所よ久遠寺の寺家ツの寺ツ一ツ日ツ七ツ

比ツとツ指ツ折ツのツ女ツ数ツ多ツ行ツ是ツをツ前ツよツ方ツ大ツ極ツ礼

とツりツ傳ツありツ也ツ。即ツ重ツ人ツのツ形ツ入ツるツ也ツ。即ツ重ツのツ形ツ

○同國多正田村は西人家より折有大本堂也。

柳屋よ丸を釣り。這渡る本堂有。この内

指二宮の程の場あり。丸を渡り行交有。その

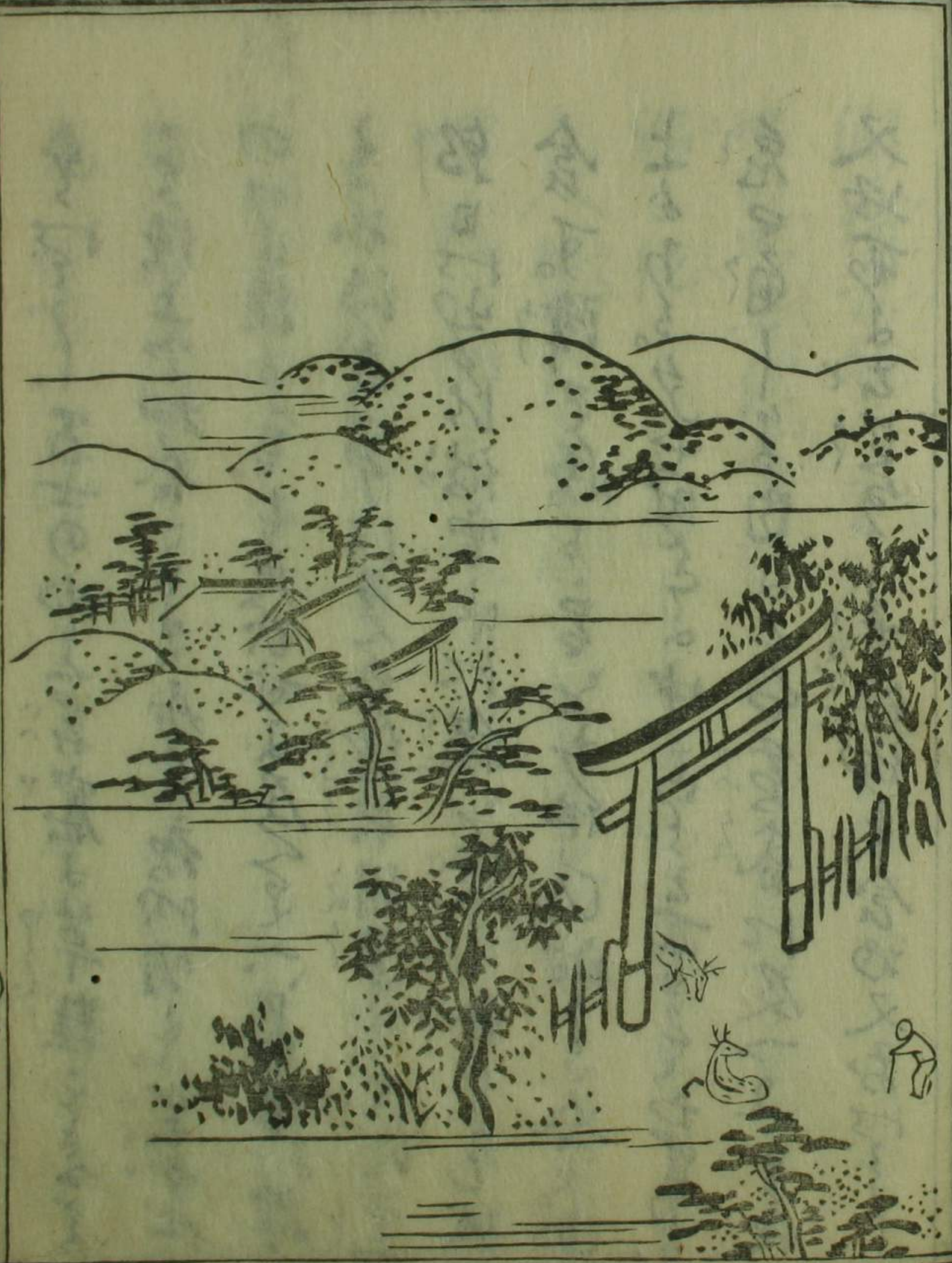
西宮余り。志危わづらひも西也。再渡るわづらひより水みづは

糸島田村より。松柳子の水出る。村中けし火
 以布巾纏と濡らしたる色濃く黄く濁り
 同國又塩井有。村中食物是とも用由。ま塩の
 味まうり。同所よりうり川下乃方湯治村
 けし又温泉有。同所けし白賣女の遊興あり
 依て信玄上世の時免許をそ。まはらう今に
 初迄。堀子より一朔までの旨。夜中ハ氏戸
 とまどして。男女の交會ハ免も。若戸所
 代管く。まはらうと内よ入るり所は

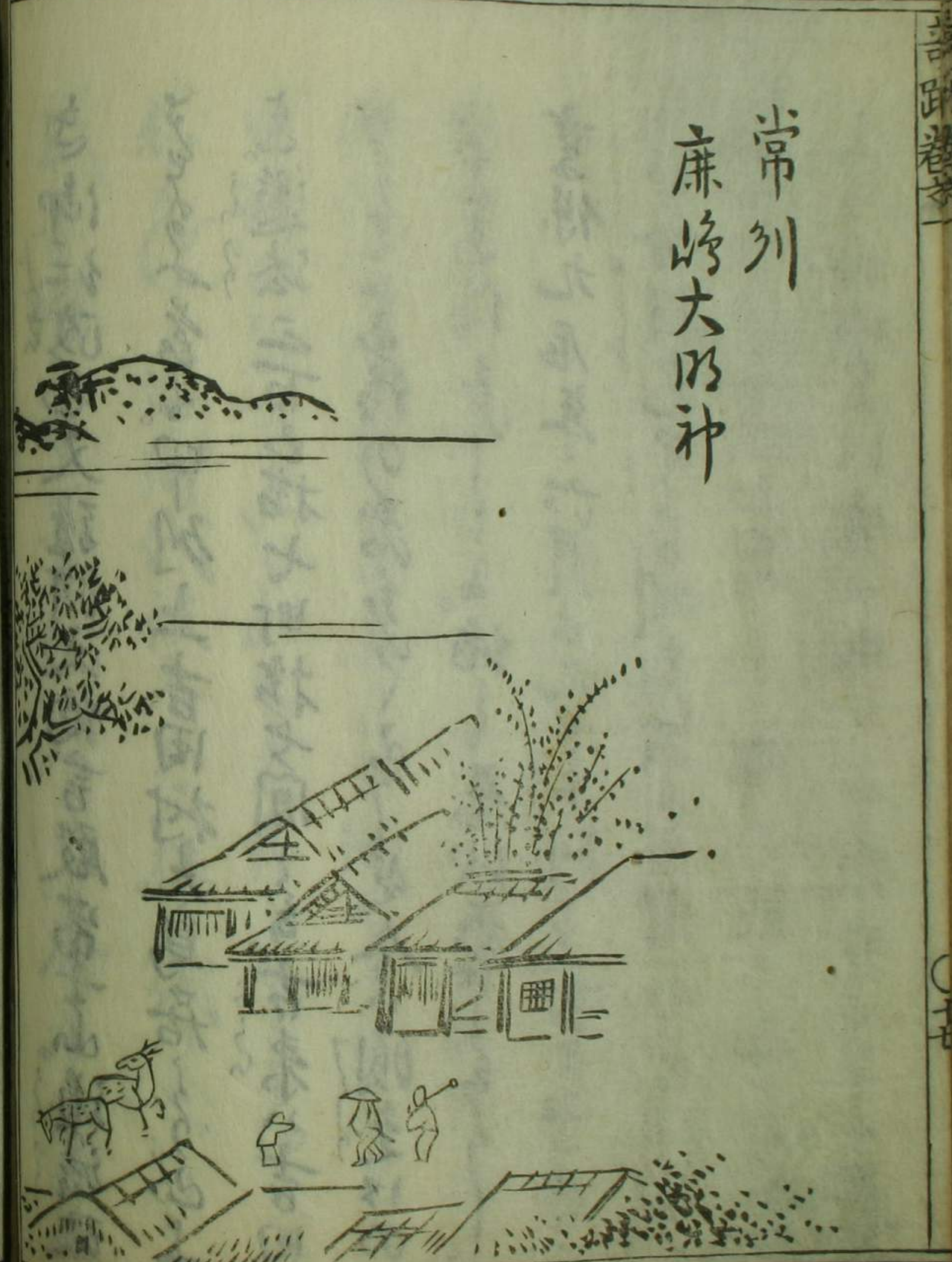
打破是内よ入るり。まはらう。是ハ禁ずり事と
 又八朔迄重湯とハ昔より存有て。彼交會を
 すもまら。この風俗ハ依て。遊女等の
 可。堀中ハ亦多く有。まはらう。近道ハまはら
 と軽く。堀中堀よ人の出入事ハ禁止せり
 じ。旅客ハまはら。彼まはら法法知りて。まはら
 有。まはら。同國名森村小曾村より耳草出る
 今ハ甲別所ハ耳草多し
 同國富士山是ハ古款も駿河の國を依り

世佐亦強河の富士より西の山に奉る所也。
元ヶ山、甲州の山なり。其の山に甲州
上吉田村表口よ。之國第一山と勅額懸り
有る。鳥居高十丈二尺あり。駿河村山口
より太刀之振青繪之貫文と。甲州郡内
御代官陣屋へ。年毎に上納せしむ。此は
甲州の富士といふ古名あり。此は初代
知らぬ。當御代被太刀之振の代りよ。小刀之
に青繪之貫文上納す。其を命とす。昔雅

き御仁政也。又強河大納言殿。富士山道法政
と云ふ名も。甲州上吉田村大鳥居より山上
と。道法二百廿七町指七間と云。古来ハ吉田
より富士の表の表多し。今、須走の
方に表多し。此は表口より。一
享保九辰年六月廿九日未刻。富士山に登る。
六七分程光りし時。左右は大雷之を鳴。大風
あり。此は雨の下の降。此は山上、降
上る。此は雪の成。此は夜多し。事巖



常列
麻崎大明神



きつてし、富士の山と岩窟は草鞋とてかき
き後上市押合にぞと居く夜明けも、岩窟
のけは積り雪をたかすよ及くと六月雪は降
るぬれ事には足ゆ。終東困苦して湖聖
船日出るは波雪水に備と浸し和く是法
食す。降り雪と君と赤拂ひ。油を合せ。山
上かりら。夕七時とて中をよとあまてお置り。
鬼の角一なる肉よとや黄昏に及つ。一夜
又此取よとほりて、草鞋も。合也又おぼく

湖備而持乃麦粉は山の物と合して其言
中の凍若代清ぐ誠は嚴密と是あす心考云
信は絶り。も備く水と求る事。おと器
入焚火を解さ。白湯茶碗と一ツの水
價錢八銅と以代る。はあかの中法も事あ
らざる湖く面斗と君水と以ては法も
駿河國。富士の人完。すけ完は入事三指面斗。
肉の形も然るるは脊の道と泥印り中
先へは事とほりて雪中に立居り如く。

高津うし。昔仁田^{仁田}に所とせんは元入と
洗の道ども。南村のち中く人の行な
ゆよくも。洗元のを成人元村と
人元と洗村乃氏種なりと云。其神号と云
らゆ。ゆ何なる故ら。富士山より二里餘
彼人元村と云。西有。富士山の内よ人元有
云よのゆ

○同國河那上田村。海陸通を清。朝倉之清
の云と洗在清茶のな然りゆの在者

其代り垂れ。忍冬酒白鳥徳利と云。故河那
事なりと云。上田村の入口。大井川の
上也。洗所ゆ。長サ口を控間と云。水際
より控間程。水早まの天の如し。この物
その洗ゆの時甚亮して魂をまりゆ。
洗所の仕。両方よりなぬ出。中へ控なり。は
らひ洗ゆは。危事と云。洗力よ及
りゆ。その洗ゆの洗者。洗るの代ゆと云
道してお音流りる。洗河一の新有

常陸國鹿嶋大内神。神武の比用基也。即千
 年余の歳と云。伊山（多岐八九町 南北指口町）鹿多一。民衆に
 大の如し。社領地あり。寶物も常陸常と云
 ぬわると云。要石。上より覆る。おろりゆりゆり
 回下沙ゆると云。指口を築く下の小女ありと云
 と勅む。回下高天ノ系。世より神軍の場と云。
 河所末所。河。英西津東津のまのり
 尾張國津島大社。牛頭天王。日本惡路神の
 宰と云。六月七日。回下向き船乗者。貴賤

群集（ぐんしゅう）とる。伊波地（いばち）迄至る。ひな子大祭也。
 十町の東は社。松明（まつあかり）のぞく。なる火出ツ。三
 万三千は社。入替（いりかへ）と云。都る（みやこ）は。流行（はやり）
 病の厄神（やくじん）出ると云。十町よりは社。のりり
 家毎り。戸名と云く。静と云りて。東
 中より。お喜と云。伊事（いこと）津古（つこ）りの風俗（ふうじやく）
 今より改ると云

卷之上終

天竺山歌

Handwritten text in a cursive style, likely a transcription of a song or poem. The text is written vertically from right to left. Some characters are underlined or have small annotations.

本朝奇蹟談

卷之中

伊豆國天城山。上下六里の内水少あり。極て
深山まへより山い蛭ひと云出木の枝えだを落おちちて
血ちを吸すひ。さうがううくくは成なて自よら落おちち
たり。又または道みちらを推おすすと化かり出いで。けいりりと
温泉おんせん出いでるす推おすすの石い代しろ代しろといけり。七日なな日にち
も血ちがあらなくなるす。一説ひとしは推おすすの石いと芥かいらひ
あり。皮かわのうへくく縫ぬいでききといはなすす推おすす出いでるす。

紀列熊野山中マミ多マミ石マミ多マミ又大に村
水晶石出マミ山あり。以石六角マミ是列真マミ
の白石英也マミ

遠江國以所産河阿部マミ名取借マミ茶多マミ
出所阿部茶マミ世交易マミ多マミ遠
列の茶あり。又駿列遠列古何マミ大直一
船ハ不強勢列志列鳥羽マミ也。夫々江戸一
渡海也。故何マミ遠列駿列ハ天龍川
大井川富士川安倍川ハ大河マミあり。砂先

海一括マミ里も出。渡海成マミ。依マミ志列鳥羽
一系込マミ。夫々江戸一廻船マミ也。

下野國中マミ禪寺の山下に神石マミ。牛石マミと云有。神
子石マミ像マミ女子乃マミ容マミ似マミ。牛石ハ牛の形マミ
似マミ。昔々マミ菜繩マミと云是を繫マミぐ。ワケのぶマミ
野列一團乃マミ孝化マミ也。此牛喰マミと云。中
禪寺の湖水。長ハ三里横マミ五里余。此上マミ西
湖あり。都合マミ八所有と云。日光大谷川の上
之湖マミ上神マミ也。昔男マミ射マミ權現マミと上野

国赤城権現といひて、神軍をいふに、此の地と上野の赤城一取らる。故に今又上野の地名をいふ。中禪寺の温泉に上列の人入湯せらる。時ハ他五の名借りてあると云。中禪寺権現といひて、七月七日、此日上列赤城山一向の夫と發つといふ。又赤城山、日光乃男神権現の方一向の夫といふ。此男権現志山、七月七日より、初人登る事あり。又七月朔日、此山は光る所の志と禁山といひ、維彼山も登る。此山に於て大

小便せらるるを禁止と。御と雖も、逆者といふ人殺すと。是は構り候。何事どもかあ

○同國華嚴乃禱。七八拾百言記、兩より言又、和國に双に流と云。此道在根上人參其外、葉系あり有

○同國於須野の教生石、於須野の嶽の禁に在。此兩湯あり。彼教生石、亦割移り候。是又是を嘗て味と察り候。又、堂の石

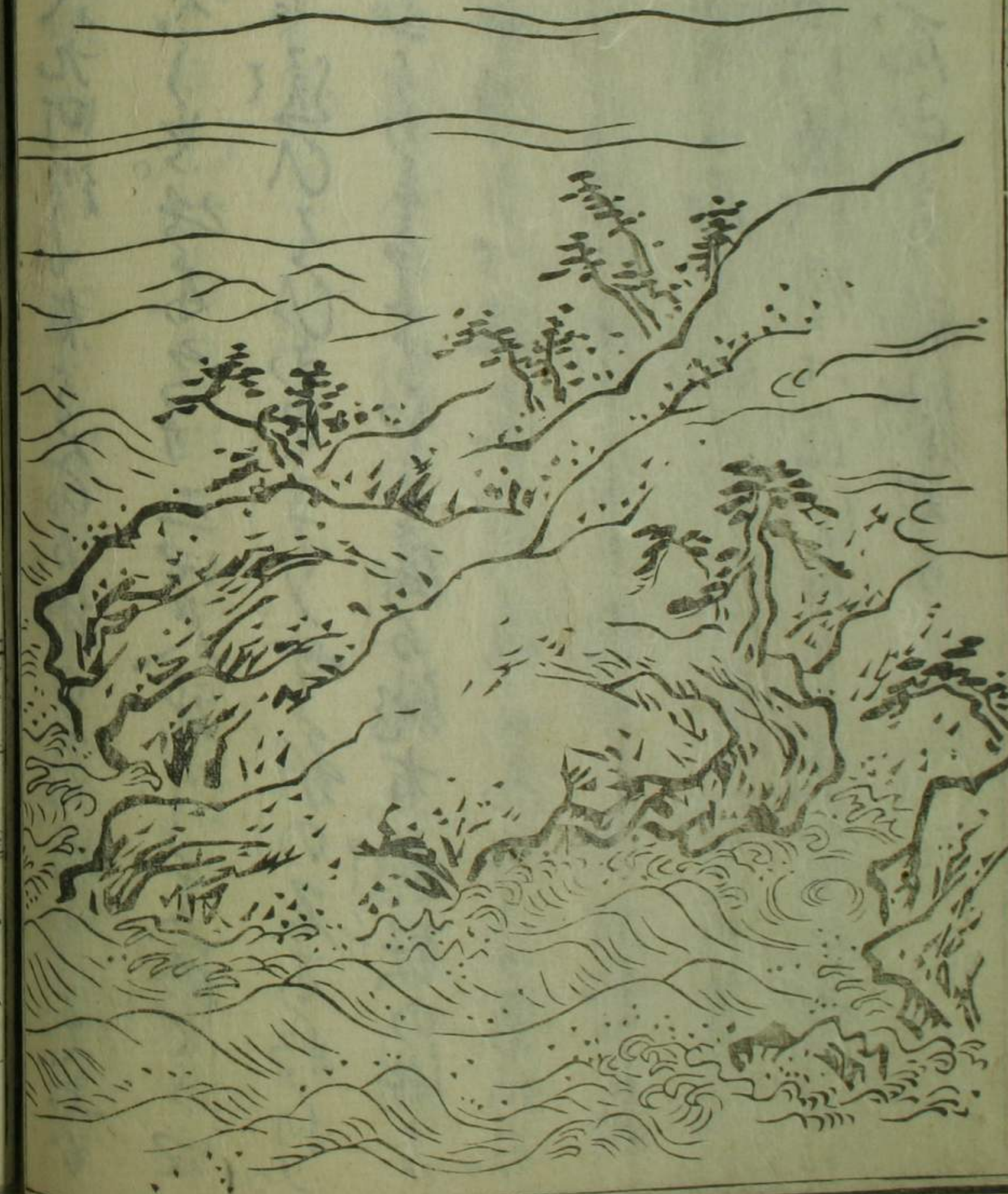
異なりしなり。此石の石硫黄壺と云ふ。
此山の温泉涌出の時。救生石ある場所に行
きたる時。禽獸も石と忽死と云ふ。予彼救
生石を打割て持来しニツツ岩と云ふ。此頂
地の東七里四方有と云。昔に延之百四拾之里
有と村老の言傳ふと云。古の十里ハ今此壺
地ニありて。此壺ハ此壺と云ふ。

○同。日光山乃内。如法山也。這松と云名あり。
此壺の石。即此山に方有と云。此壺は此壺と云ふ。

松八九町程も有と云ふ。根の石ハ岩と云上
はくとも。此壺は此壺ニ曰尺計ありて。此壺は
方に遠くひるひありと云。昔此壺の名ハ好利。
此壺より三里半程と云。此壺の壺有。龍歌の壺と
云。中禪寺ハ温泉ハ此壺より志ありと云。此壺は
大岡秀吉ハ放し給ふ壺也と云。此壺は此壺
壺は此壺に居ると云。此壺は此壺に居ると云。又日光山つと
是尾山より瞻望せしむ。

奇亦卷之三

阿
那
渡



阿那渡

阿那渡

下総國小見川内田何某願内よ。曰季嘆其操也。ケ
所よ有。まをたハ八垂をいハ、まを重なり

近江國奥の嶋農人誰たより今ままよく都子

とらものし例年十月朔日奉祝く 林祭庭に

上るく云田例也。何海あり。又奥の嶋村乃

急。新く成もの中より出給

紀伊國牟婁郡相瀬村よ。日本に一つの大石也

と云り。 高サ七拾九間 横二百六拾間餘 け石古庭川と云川の

傍に在。野中村秀衛の母操と云名本有。奥

列の旅客何哉尋ありと云。高サ八九間有六本

子別よと云枝あり

○同國熊野山内村子里濱と云所よ。唐京と云

物海より出。眼の茅と成。同所より濱ありと

法書一冊有。まをまハ濱木綿と云

○同國薩志村よ。舊跡有。真砂店曰。娘法也

蛇より出。彼所の鐘と云。まをま出。まをま湯と云

云。今俗に鐘志寺と云。天曜山道成寺と云

開闢ハ文武天皇勅願ありと云。大寶年中乃

御弟創純大臣道成公奉行す。之を。鏡老の
由来ハ醍醐天皇ハ此宇。延長六年子八月と云。
法非ナニ威乃時の歌也

此の世共賢人の道とニ態神の神乃志等ハ
奥列白川の僧安珍返歌

ニ態神の神乃志等ハ此の世共賢人の道とニ態神の神乃志等ハ
道成寺用藤ノ是星我子年ハ此の清非蛇
ノ成ノ時ノ是。ハ百年余母ノ是。此寺の堂
作ニ此の儘ト有ト云。歌ノ子も有ハ此の

古跡アリ。ト當九宮ノ指々有ト云。ト當子年
觀音。長テ。素更ニ尺何リ。國印ハ石ノ是

○同國言野山ハ大秘所也。是此等神の名所
リ。常の糸諸旅人ハ此所ハ入ル所。此道大毒
水有。弘法大師の歌也

志ハる。海ハ志ハる。旅人ノ名所。奥ノ玉川ハ水
執事。より毒ハ法夜ノ制レ有。同國態神
の内所。ハ。此根上人。多有。慈尊院村。ハ大木
ハ肉桂ノ是。巴戟天葉草の名也 何也

淡路國

東西七里二十拾町由良ヨリ津井迄南北拾三里貳丁岩屋ヨリ福良迄村敷拾八ヶ村深山大川ナシ

鶺鴒島天地大明神

伊弉諾尊 伊弉册尊

伊弉册尊 伊弉諾尊 伊弉册尊 伊弉諾尊 伊弉册尊 伊弉諾尊

に七指の夜も

正月十六日七月七日 八月十五日九月十五日

伊弉册尊 伊弉諾尊 伊弉册尊 伊弉諾尊 伊弉册尊 伊弉諾尊



同國大櫻並村此所芦原國と云ふ此之拾間

四方田中在。同天乃浮橋名所也。同自求

皆崎。ついで神代卷を見ゆると村老云く

〜〜〜の流るる名所と云ふ同之條村は西の流る

淡路の流るる名所と云ふ同之條村は西の流る

〜〜〜

阿波國

東西貳十貳里貳町 南北貳十六里

鳴戸。日本一の海と云ふ

淡路の阿波へ三里毎渡り也東南 風は出船ナラス 西北ノ風ニ出帆ス

大井川の流るる。是流の時、雲も隠れ潮も

流る。海上静なり。詠玉は波海を。波流の

時、山のくくたる大波打魚。詠玉は立雲有て

け巖は波のうらうらとくく。中にも

鯛の釣取も。鳴戸鯛と云て美味なり名物也。

三里切戸。鳴戸の内は鳴る。花鳴りも多。

生子富鳴る。鳴戸は深サ北百尋なり。いぬ。

鳴戸より船を繋り上る所ハ松谷と云ふ所也。流路阿
波の玉境也。此所より順風ふんかぜ并船吟味の園所有。
船の上より傷と松谷は是等と云古跡也。里乃
海士濱の古。此所を兼好法師の歌よ

世中と流りくく今も志る河はの鳴戸は浪風也

○同園一の菰取也。仁井田村。此辺は松根上人参りあり。
田中窪村の菰大菰取也。此菰揚長。此菰松百余幅
此尺水際より高サ二丈余。此川水青くくして

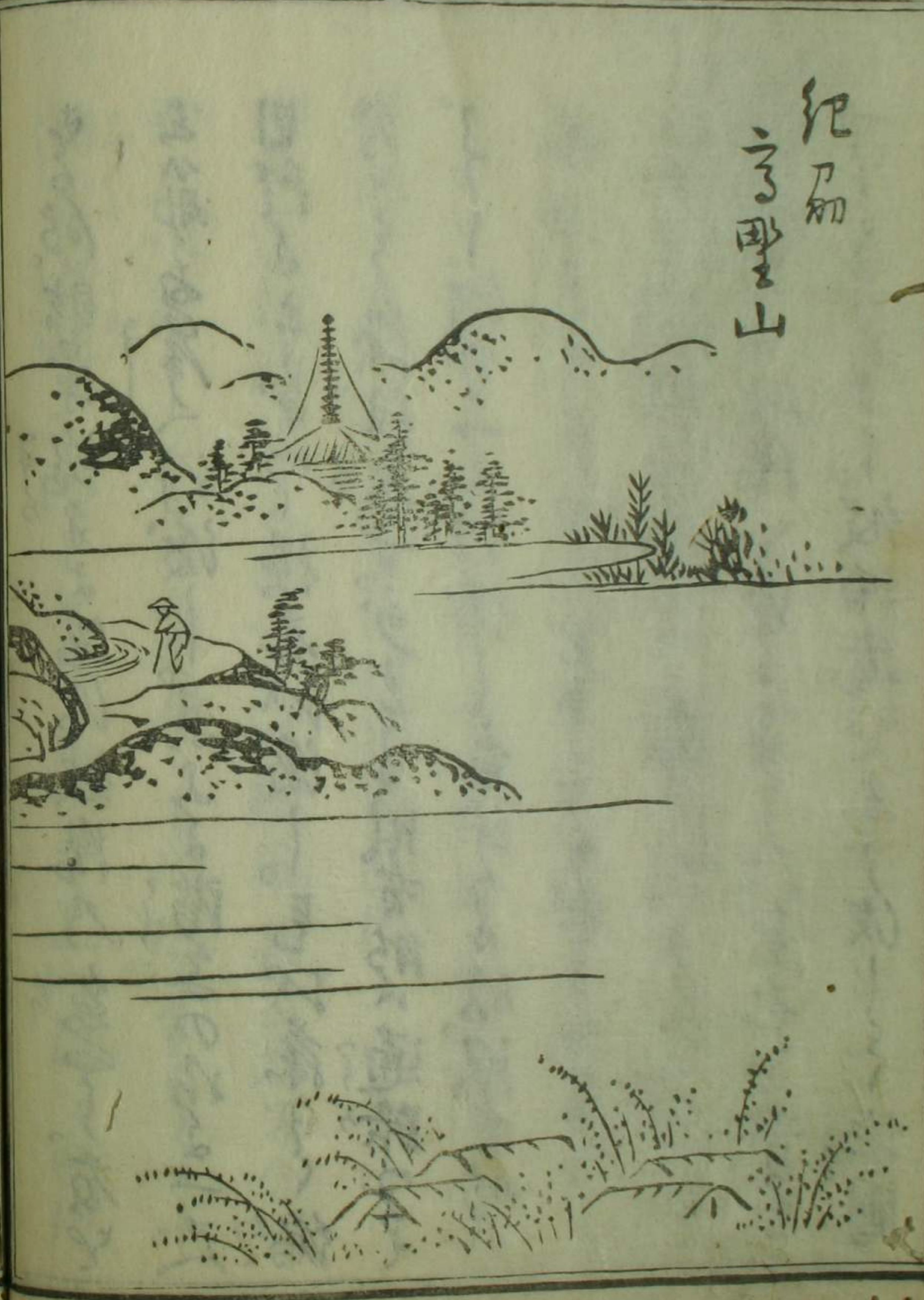
濁也。深淵ふかふち一丈餘と云ふ所。此上は流と云ふ所

此の所。眩暈くらやみ魂たまご身みは流路。彼菰乃魚ういり。菰と
云ふ筋すぢを岸きしへの河に流す。其の流路は階子の如く一尺
目筋めすぢよりきき中つ横本に流す。是は菰こもを編あ
付つくは往來つうらいす。少くも風有るは通路つうろを
くく。河のよより流し並に流る所。風有るは
甚ゆき。危あやま中々なかなか菰こもの葉もも及およぶ
よか。此菰こもは流路より落く死しのりりのり多
し。此菰こもと云ふ者も其の形色と云ふ也
す。此菰こもは流路と云ふ所。此の地ち國くに

奇亦卷之三



紀
之
山



詩
跡
卷
之
三

九

の旅客。多き御うく。至危殆と憂く。六七の山を
踏渡りし。此處は深き谷あり。予は深き
淵より這より如く。て向は岸より登り。是より
了る。路に危き事。言語は終り。此處の危き
○回國河川村。一宮長門守古城の跡あり。此所
を長曾我部長坂三郎と云ふ。回國河川
有。一玉より三ヶ所の古跡あり。回國境の山より諸
國の船乃播出。此の山より入。與中山小屋と云
ふ。内は居く。夜は明も。終は野麥山なり。本

と伐りしに大なる者。すま。さ。物者とも。此。案内
よ。こ。の。河。川。の。山。は。昔。々。云。此。山。は。赤。熊。天。狗。の
お天狗と云ふ。大魔術と云ふ。傳はる。由と云。こ。の。夜。は
又。山。荒。疾。風。面。と。搏。大雨。迅雷。誠。よ。冷。寒。何。れ
云。案。に。指。し。新。し。道路。は。狭。き。地。り。て。丸。石。と
散。々。水。波。は。行。不。多。し。回。る。八。坂。坂。中。八。濱。は。反
中。こ。の。山。は。坂。上。下。り。山。は。入。濱。は。出。る。事。八。夜
す。る。故。よ。は。名。を。と。云。に。回。國。の。名。ありし

古佐園甲の浦。船着の名物也。江戸麻を交易

奇亦未三

丁の節。一節を價百三拾り百四拾錢斗もよつとい
と。此節を終七八錢よる節。大サを尺斗も有。
又回國春夏の比。海より夜に龍上を。人家は
火を換ぶ所。依り村に左敷羅法螺と名を置。
人民大勢集りて是に送る云。たはりて他本
へ行り又海へゆり云。此國村に是本の
道を以て用事し。而移す云。予見回するは虚
誇り。又回玉より小馬出る是を世は依
仰る。是は彼玉の馬より小馬出るは片端者なり少類也。

此玉の馬。肝強く丈夫く足強し。百數十里
の道。皆と打どして京都より出り。足痛心の憂はし。
彼國より限り小馬のそ有るを尋ら奉。志深足つ。彼
小馬は亦多くハ用ゆる所。馬口勞弊の名は價よ
うりてさうしてさうり。

○回國言知山城下。い後に吸口と云名有

自心はさうくさうひの好む名も玉とさうり
兼代やゆりぬ君と名をいふ。さうり石毒の毒
煩悩のさうり切て助舟ここの名をいふ。

此奇蹟天志所感。其外難々有之。如老の活々も
これと此方同國の邊より古俗小杉糸色に由り。
鷲名島の物産。尾戸焼土器。又硯石。茶碗等。皆
名物也。同國若菜山。木屋。此邊木根上人多。其
介上品の薬材類。極大難取の山坂敷
ケ所を

○同國并は玉の内。大神と云ふ事縁有り。故りの
類々其人ハ婚姻と云ふ俗。此大津と云ふ事。此方
他の所移の事ハ何れも。此の事。求む。他の人

是と云ふ事ハ附ハ。其人ハ病氣と云ふ事
求り事ハ難言よし。啼泣す。是と云ふ其事ハ
と彼者よめこと。病す。此に平愈す云
伊豫國大寶寺。一國の名不古跡有り。おる十一面
観音。右き方に岩窟有。此所へ登ると即珍事
何ぞ踏みと上る。精進潔齋して行。たると
忽天狗ハ魁と云ふ事云。此民甚恐る。其
上の方に。別山権現。白山権現。高祖権現の社有り。
弘法大師の勅と云ふ事云

心も定まらず相争海をへて北風と浪をくぐり

○同国西條領石漣山に玉一乃言ふと云大難而也。

此山は時ハ二十日積進して行ふ。上下とて六里

余麓分此里も余登るは其より登るより

すゝらり岩ありて、と云ふ打とて是。旅は百斗の

鎖と下り。と云ふは此山上に於て。又其上に此旅

万斗の鎖は下りて壁に立るは此岩に登る

行不有。此鎖は右へ少し振りてお尋の谷へ落

く死す。甚危き大難而也。凡百の六旅人其の

人数、山の麓まで、誠にかうか。此岩物と云ふ

んと怪ひ何んぞ。御り又彼難なるを。山上へ

行ふとつとつ一人もか。予は又上り續く

人湖口人々もつとつのか。山上に藏王権現

大小三社を。此山より下りて觀るは其の危

き事誠と言語に絶する。林業の心民も二夜は

事ありと云

讀改國。金毘羅權現。右の手に錫杖を執。長三尺

余。此像。金毘羅權現は直作なりと云。又此所

葛麦乃名物也。徒仕の者履席と草鞋と履て
出。往古よりこの風俗乃由。此所は町繁華一
て遊女もはば多し。向は横列は富士山と云山
見ゆりあり。雨の秋と云云

横波と云ふとや富き飯の山遊来は煙絲の月も
け弁古音多し。同金小豆糖。塩飽島。並
崎。を升小島多し。鰯名物。塩飽崎八ヶ峯
と云。南又去列はゆるい。東は飯前飯中と云。北
西に備後又ゆれ。西南は縁別見ゆり

○同國屋崎観音。おと十面弘法大師の作也。別
南面山屋嶋寺是也。伏羲次信石碑あり。丈六尺
即寸。文字分明なり。此處は昔源平の古戦場
なり。此所乃海より平家蟹出る。蟹の甲に
人面を平家は怨念を依りてあらむ。別
鬼面蟹也。此蟹と云は指拵糸して是なり。

○同國丸島城下は見附屋敷と云。商人者彼方
に種神一木の庭あり。六七百は種植あり。
長テ四尺
八尺
九尺
一尺の敷
は若居宅あり。坪余あり。四一乃

河

奇書

蟹
蟹
蟹



奇書



野

○同五八峯山名也。弘法大師用基。合引の地。明順
与市麻子名。的石。同菊王丸塚有。同國志。度浦
賑友。濟し。以。訓。く。面。向。石。背。の。石。と。名。を。述。ぶ。と。
云也。以。寺。清。淨。光。院。志。度。有。城。之。石。七。指。石。付。ケ。
お。當。十。一。面。觀。音。寶。物。散。多。有。

信濃國。依久那。經井。決。富。分。少。く。行。ん。芝。野。有。り。
こ。ま。道。了。下。糖。拾。口。お。好。夏。多。く。小。石。子。以。生。
し。と。先。年。以。下。甲。府。領。と。成。其。節。々。有。り。

やま

○同國。小田。安。富。山。か。く。一。山。也。今。井。忍。此。所。也。言。
月。輪。芝。に。在。指。渡。一。指。七。指。有。此。輪。の。石。一
牛。馬。於。此。杭。と。井。の。邊。又。平。金。作。每。夜。右
の。輪。馬。と。宗。く。ら。通。う。よ。に。又。ゆ。る。也。山。名。若
野。井。村。の。先。也。本。曾。以。無。橋。有。長。七。指。石。付。欄。
了。と。不。い。お。指。を。言。石。地。指。口。同。也。慶。安。元。戊
子。年。三。月。又。作。く。い。つ。と。是。此。書。有。不。く。よ。り。

○同國。寢覺の麻。名。不。也。若。若。麦。の。名。物。寢覺山。

同國

臨川寺。本智道中^{んせんど}中^{ちゆう}一乃絶景^{せつけい}らる。近^{ちかく}瀟^{しょう}殿^{てん}。
奇^{あま}よ。

吾川の志よ^{おの}、あも^も結^{むす}り^んと^を、寐^い足^あの^なと^誰名^な有^あ是^{こゝ}。
○回^へ國^{こく}更^{さら}科^か郡^{ぐん}。姨^{あや}捨^す山^{さん}。彦^{ひこ}火^か出^い見^み尊^{みづ}打^{うつ}妹^い船^{ふね}。
よ^もて^おし^し度^た々^々の^ま法^は心^{しん}、^おり^ます^り。魚^い、^うり^のも^ま結^{むす}よ^もあ^らく^く。此^{こゝ}所^{ところ}よ^も捨^すら^せら^まし^ます^{。ま}と^くして^い今^{いま}よ^も雨^{あめ}乃^{すなは}名^なと^まる^る也^{なり}。
此^{こゝ}所^{ところ}の^あ縁^{えん}起^{おこ}よ^も足^あく^く、^こり^{。姨}捨^す山^{さん}よ^も姨^{あや}と^捨捨^す事^{こと}。大^{おほ}和^わ物^{もの}結^{むす}よ^も見^みゆ^{。彦}火^か出^い足^あは^る事^{こと}人^{ひと}。
又^{また}月^{つき}乃^{すなは}又^{また}一^{いつ}、^あら^くく^く。又^{また}月^{つき}乃^{すなは}又^{また}一^{いつ}、^あら^くく^く。又^{また}月^{つき}乃^{すなは}又^{また}一^{いつ}、^あら^くく^く。

名^な而^を第^だ。諸^{しよ}國^{こく}よ^も中^{ちゆう}嶽^{たつ}の^後。此^{こゝ}所^{ところ}よ^も又^{また}一^{いつ}。
月^{つき}乃^{すなは}又^{また}一^{いつ}、^あら^くく^く。回^へ每^{まい}の^月と^ま事^{こと}。必^{かな}説^{せつ}。
阿^あの^{こゝ}ら^く。古^{ふる}今^{いま}集^{しゆ}の^奇に。
我^{わが}心^{こゝろ}あ^らく^く。又^{また}一^{いつ}、^あら^くく^く。又^{また}月^{つき}乃^{すなは}又^{また}一^{いつ}、^あら^くく^く。
鎌倉^{かまがら}右^{みぎ}大^{おほ}江^え。
月^{つき}乃^{すなは}又^{また}一^{いつ}、^あら^くく^く。又^{また}月^{つき}乃^{すなは}又^{また}一^{いつ}、^あら^くく^く。
名^なを^もた^ふ月^{つき}の^あら^くく^く。
い^のお^のら^くく^く。

飛驒^ひ國^{こく}田^で畑^は殊^{じゆ}よ^も下^{した}ら^くく^く。深^{ふか}く^く。吾^{わが}深^{ふか}く^く。六^む七^{しち}の^月よ^も。
阿^あの^{こゝ}ら^く。酷^く暑^{しよ}の^節の^阿の^{こゝ}ら^く。朔^{しやく}ノ、^あら^くく^く。又^{また}月^{つき}乃^{すなは}又^{また}一^{いつ}、^あら^くく^く。

奇^{あま}よ。

常々農民の食物。薪の根と喰ふ。又粟の本々
 乃寄木と採りて。その汁を煮し喰ふ。やけ少くは
 寄す。軒中蠟燭を灯し。髪月代と云はよ中なる。ま
 木の男女をいふ。ま。寄異の事には思ひ。殿ハ大根
 又火を燈し。既と面より。うさきて。甚病し。即ち平
 人も立寄けし。ぬ申の病は。是は。入る。男女乃
 形。和。佐。く。ん。と。思。意。鄙。之。比。迄。の。人。死。る。所
 の。名。は。平。昔。に。く。引。導。り。葬。送。す。ま。り。と。也。此

邊下品。地よりして。男女の船。ん。を。船。さ。り。多。し。
 六月。去。月。中。ま。の。二。三。夜。霧。あ。り。の。有。依。り。回。船。よ
 栴。有。く。久。舗。有。の。の。地。ろ。り。う。と。ま。り。と。は。不。在
 根。上。人。多。鬼。督。郵。河。り。捨。の。り。枝。り。り。赤。白
 二。通。り。の。色。を。り。り。揚。枝。木。出。る。比。不。拾。目。細。工
 名。物。也。同。玉。福。崎。村。比。迄。り。り。修。く。嶮。難。の。名。を。て
 而。く。山。の。崩。し。一。面。丸。ち。と。夜。ま。て。物。に。こ。ま。ま。と
 通。路。も。る。更。敷。を。不。有。る。名。所。多。的。は。十。一。り。死
 鬼。り。者。好。し。上。々。り。と。わ。六。拾。留。も。有。り。

流くして石と流と。此邊の六月雪妙く

○同園大牧村。此河は白川と云。河有。渡場は籠

の渡しと云。是處所なり。此渡場の後子六七

十留程も川幅有る。其傍の岩乃

鼻。攝猴藤と云。夜は一節向の岩まき引

渡し。並六七留程の後。十文字に橋と通

その橋の内一人と家と。此橋は志く取付

細き橋を川の向へ引者渡せり。危き事

中々。其岩も端よ及難。其川淵多く。渦巻

水音々として。兎角。親よ及難。其大難也。

此渡場の籠と引者。上人引。代友引と云

る者。上人の徐々引も。代友は強く引事と云

引渡は強く引外ゆ。別る危く。是ゆなり。

引渡と。夜の中程。少を撓る。水際を

十留程有。此物と放と。底の志。ぬ例

一息。流死と。年々。流死。その引者。あり。ふ

此河。我中に。此河と。流く。志。也。

道より七言歌程遠くし^{あり}備二夜渡りし^{あり}も
よもにたけ渡りて渡り人毎よを危くし^{あり}
形色状換せり^{あり}。予此輪より乗り渡り
危事^{あり}とて^{あり}。辰の刻未の刻と。八九折人
上下人歩おて急^{あり}かく渡り。此^{あり}を神酒
可^{あり}と飲す。然て釣^{あり}の^{あり}揚丸を揚^{あり}り^{あり}向
ま^{あり}。は^{あり}菴^{あり}に渡りて渡り^{あり}後^{あり}い^{あり}る^{あり}乃
喰^{あり}難^{あり}の所^{あり}。又釣楊と^{あり}海^{あり}と^{あり}し^{あり}も。常^{あり}の道
乃^{あり}海^{あり}東^{あり}堂^{あり}の^{あり}り^{あり}。平湯村と^{あり}い^{あり}ふ^{あり}の^{あり}菴^{あり}の^{あり}渡

一又釣楊を長^{あり}サ^{あり}部^{あり}拾^{あり}百^{あり}余^{あり}。字^{あり}サ^{あり}お^{あり}り^{あり}余^{あり}り^{あり}是^{あり}。
二河^{あり}早^{あり}き^{あり}の^{あり}矢^{あり}の^{あり}如^{あり}し^{あり}。此^{あり}平湯村^{あり}色^{あり}よ^{あり}は^{あり}茶
お^{あり}き^{あり}ま^{あり}よ^{あり}て^{あり}。而^{あり}は^{あり}は^{あり}は^{あり}は^{あり}大豆^{あり}の^{あり}所^{あり}予^{あり}も^{あり}二^{あり}日
食^{あり}也^{あり}。大^{あり}下^{あり}品^{あり}の^{あり}所^{あり}も^{あり}。而^{あり}は^{あり}は^{あり}は^{あり}は^{あり}茶^{あり}と^{あり}ん^{あり}き^{あり}り
その^{あり}村^{あり}中^{あり}よ^{あり}多^{あり}し^{あり}。人^{あり}死^{あり}ま^{あり}り^{あり}時^{あり}之^{あり}を^{あり}儘^{あり}の^{あり}煙^{あり}
し^{あり}とい^{あり}ふ^{あり}。同^{あり}玉^{あり}言^{あり}山城^{あり}下^{あり}。人^{あり}家^{あり}亦^{あり}之^{あり}百^{あり}軒^{あり}。^{東西八町}
^{南北拾六町}飛^{あり}彈^{あり}網^{あり}拾^{あり}目^{あり}細^{あり}工^{あり}。は^{あり}二^{あり}品^{あり}名^{あり}物^{あり}也^{あり}。

巻々中終

卷之十

南北諸 爲 經 緯 圖 爲 十 九 二 路 經 卷 門
The 19th district of the 10th volume. The text is written in a cursive style with some characters in red ink. The characters are somewhat difficult to decipher due to the cursive script and some fading.

本朝真跡談

卷之下本

裁中國富山より加列打方一少以ん。佳選子母
橋よりいん一七橋六艘より掛る。日本一乃船
橋也。同玉立山芦許寺。是より立山一好橋よ。
社僧教テ所者姥堂五間四方 西向也加列より
米百俵宛佃穿 入也年々寄附有る。前より大
の浮橋より長サ約百横歩万余。同前より大
なる橋の爲有る。括ニ尋出ると云。臨爰大本

新編

あり。浮橋は古奇あり

浪高く激る瀬も好く身寄りよきあり病む人
こゝをうつる。瀧人志望原。此所より立山神社権
現まで大程あり也。九里八丁ありといふ。権三
程あり。志望原。此道より立山の根より取付。湖
邊あり。其外ありあり。腰丈の川に入流る。又
あり在。又正明川と云川は。長サ計七八町あり
友也。湖邊あり。法園系詣の者。権人の内八九
人を計ありあり。此所より立山神社。法人は

より舟してゆり。此所より立山神社。彼所橋と

越く。此所より雪と踏みて。お里程あり。又

登と立し。なり成所と云。里登る。一と上

よ。立山権現の堂本社者。南向九間。南向中宝藏

動。此所より。東の方。日光山見ゆる。南乃方

信列。淺石山。飛列系。鞍山。ゆり。當山開基

慈。奥上人。大寶元年。元文子。庚申年。まて

千。字。十。有。余。年。よ。成。と。云。此。所。の。寶。藏。は。宝。物

貯。る。心。中。の。志。望。原。乃。湖。水。を。い。と。云

温泉涌出。是とまふの地獄と云。糸治の
人と迷りて磯と出づ。又山中は鶴と云鳥
を。雉子の雌と云。能冠河。其名也。
此山の名も云。まふの険難なり。富士一
十夜登るなり。まふ山一一夜登る方甚辛勞
す。廻國は僧も山上へは行届者少し。云
六月十日。同十日。予は山中より居る事
五日。今年ハ凶年也。遠く暑熱強き方に
覺ゆる。此山の上の言はる事。其火口

尺を。水沢求むるは雪沢器入。火は積解
して水と可。雪は流る。其水冷り
なり。何と煮る。何と煮る。何と煮る。何と煮る。
補。周子寺の井。其水。其水。其水。其水。
也。彼流る。其水。酷暑の。一日の。一日の。
清り事。其水。

越後國頸城郡。松代村。牧野駿河守河内
地の内。油涌出。其名と。其名と。其名と。其名と。
石腦。此油と。其名と。其名と。其名と。其名と。
油也。此油と。其名と。其名と。其名と。其名と。

らんがくくんとす。雨覆あまのひとあり。一日は油を採りて
完漏つま出ると云。是を汲よ。小桶は各口汲にじ。
夫より此泥どろありとあり。入せ。別其水油と取
け。油を採りて。價百六七拾錢と云。此所
草生水出ると云。大荒戸村。磯明村。水梨村。朽尾
村。比礼村。右村は長岡領と云。之島郡吉水村
こまけり。彼油あり。取らる。り。り。
○同國。蒲原郡。如法寺村。溝口信濃守。少取り。本
の内。百姓店にあり。宅の庭に火出り。此火と云

東中燈と云。正保即酉年三月。彼者庭より。糞と
吹フキふ。此火出り。云。元文お申年まで
九拾年と云。是は此用ゆ。事。ま。是。此。の
竹の筒と云。此火出り。此方か附。亦火と云。此
呼火に致せ。急いそ地か出り。此火いつ。さ。り。時。か。ハ。
其竹と云。の。ひ。心。速すみく。速く。其。跡。又。は。懸かり。
如。し。風。の。さ。り。り。此火隣。亦。焼。よ。呼。と。り。
に。ハ。水。汲。桶くと。取。り。同。前。又。筒。の。節。と。扱。
場。而。能。方。又。押。さ。り。此。方。か。呼。火。と。り。り。に

奥刃加

神田乃玉川



忽火移る事速なり。修く榎のこゝへも火は
何方までも被火事事自由なり。光り夏
掛の蠟燭は火のこゝへ。掛りも彼箇の竹一切
焼く事あり。此燄虚痰ミイガより。右同人は
所不。挿入本村大津新田此不存の逃火の皆
不。又常生水油出る所也

○同國。小笠原村。松平肥後守少領所。一國乃
縮布けんぶ改免賣買す能き所場也。江戸より
縮布類の重版言並成る所也。是より

ある次第あり。此色鞋出る。信濃川をそ綱にて

之れを取。名物なり

陸奥國。盤井郡。達谷村。此所は鬼の窟也

表間口拾き間。裏行六間。南向あり。桓武天皇延暦年中。

達谷の窟堂。慈覚大師用基の也。田村丸

鈴鹿山の鬼退治あり。此の後又此所は鬼

返すとも。右堂光り。左東に向ふ多門天皇

顔も。昔桓武天皇は勅頼より。て。田村

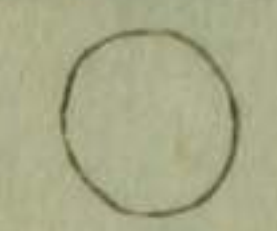
丸造より。毘沙門百解あり。今ハ貳

招不鮮談り多之。別當真鏡山西光寺云。右
岩窟より菟子なる鬼の意。惡路王赤頭。高
丸此之鬼つる也。惡路王は死して死す。赤頭
ハ伊達郡半田村にて死す。今此所より赤頭
大明神と云て氏神と云々。高丸ハ駿河清
見之関にて打殺りたる云。延暦十七年の以
云。是又真偽不詳。邨老乃語を傳ふと化す。
○同國。平泉中尊寺村に。秀衡の光營河州
三間口面河心令板也。本堂。彌陀殿立觀音塔

至地藏口射有。清衡基礎秀衡之代也。同依の
建立と云。此外坊舎板ハ軒有。中尊寺屋物
亦有。今夜は略也。城下河の極多古跡也
尺也。其色は秀衡の屋敷跡なり。所より反
河所屋敷と云。古館乃古城跡也。同河は金賣
吉次屋敷跡なり。又此所より秀衡光營と云て
有。河間口方より。霧海なる河の板と云上より覆
と云。此處衣川流り。橋は後日有
同玉宮城郡仙臺郡。松島山瑞泉寺一國之

寺領あり。此後曰古文寺附あり。松若せよ甘ふ雙その名あり也。此所より修けい景色しき甚奇き也。五大堂。本尊不動明王。慈覚じかく大師の作あり。古哥

松崎の雄略の故よりあり也。海士に神を祀りて。三輪の寺あり。寺あり。松崎あり。松崎あり。松崎あり。



同願金花山。此道海荒しく浪海は困えん勞らう也。六社明神。猿田彦の尊と云。此所より別南法蓮はつれん寺。社僧あり。社領松七曾文。祭礼正月十八

日。七月十日。松崎より陸竈と海上武皇有。松中より入浪せし。向の方又陸焼畑あり。此所より。また外より。此所の風景。言語著し。とあり也。古哥

陸奥のつらつら。此所は陸竈に浦漕舟のほらあり。陸竈の南所より。此所より。此所の玉川有。南を少く流るる川也。幅三十間斗の川也。古歌よ。夕暮に沙風とて陸奥の此所より。馬崎あり。末乃志山。古歌あり

浦迄く降る雪は白浪乃赤の松山就てくまら

沖の舟名而し又小曳のるり

○同玉市川村。多賀城の跡也。本丸の急な礎は

跡今も在る。注古比城の大手に壺の石

碑と云ふ。天平寶字六年。惠美朝搦の作

置る也。享保六年。皇霜九百八拾年

よ及ん。多賀城より京師及四方の行程

異國までの道法を記す。此碑顯赫とく今

尚好む。誠は皇和無雙の旧跡也。諸國への

旅客何れも此所を尋ねり也。元禄の頃玉之

雨露霜雪と凌人高は霞覆と似る。臺間四面瓦

は所古奇多し。一二沢記す

陸奥の臺は石文何れもくまらるる也。此

右大将頼朝は

陸奥の臺は石文何れもくまらるる也。此

○同園。岩切村伊澤た近古城の跡也。戸絶の橋

名も同く十着は浦名也。此所より菅野

編ら流と出ると十婦河より十府の菅野

り

さつづの十ぬらぎ菰七宿に宿はひしつゝ家にあふり

○同國宮城野の倉。菰は名所也。東西四百間餘 南北二百間餘古名に

高野野の倉はつゝ小萩菰と名をよむ。君が御の所は

○同國名取川名所也。古名に

陸奥よまゝのあり名取川あり名をよむ。つゝあり

○同國東城村。國見山。此所よ名をよむ。伊達乃

大城戸有。堀の形長三町。幅拾間半と云ゆ。此

所より奥列一の大河。河武隈川と云ゆ。此邊名

所數多所有。下級の國名所也。大久保と云所より

里所先に。義経乃懸掛松あり。大サ目。西より云

三圍くま余り。枝拾波東西十三間 南北十八間有。赤松也

○同國。元船田村也。耕たりの硯石有。滝川と云所名所

なり。又享保二三年の比。南半田村。百姓。喜喜妻と云

者あり。彼れの畑は古塚有。つゝ。堀崩して入る。

大なる硯有。長波三尺四寸。下齒二十六枚。上齒

四枚。一枚の幅六方四角あり。つゝ。戸は所より

一八享保十六年辛亥年。彼齒は一枚。つゝ。疑也。



了矣
義孫孫掛松



軍あり。誠々鬼の齒もいふと齒也。此所は
ふ引の石あり。古きよ

陸奥のふ處にあり。我意に荷もいふ。中絶り
不のまはてはつらむに比し

○同、古川宿。高福寺に。次信忠信の像有。此西南
半田村と云。高館の古城乃跡あり。同國福清原
中好村。依藤氏司り古城。本丸の跡と云てあり。
百間口方者と云。鑄野村。瑠璃光山。醫王寺。依
藤庄司夫婦の墓所。次信忠信兄中の墓所

有。寺願除地三指石ありと云。辨慶り正業。と云
富物あり略々

文治九年八月八日

- 真性院殿鉄山勝信大禪定門
- 光明院殿玉花昌蓮大禪定門
- 吉祥院殿八遇次信大禪定門
- 清光院殿劔勝忠信大禪定門

文治二正月十三日

此寺の門は丸形。次信忠信の箭竹と云て行有。

年々付前より生る。仇藤親子の墓はうらうら。
 旗竿は竹を二股の竹に古き塚多く。勝信の
 家へ轉り。浪は車の蒔繪。澄の者。飯塚村
 と云ふ。百姓中村を連つて。是れ者も此所を波
 者り祖父某。依後衣司の家筋の者多し。婚姻は
 信の。に。波も此所を祖父へ譲りて。此所
 依りて。此所の家も波も。古き塚の祖母
 の名いぬ。中。右へ轉流も。多し。是れより。
 誠は古代乃。是れより。

○同國福崎。板倉甲斐守城下。に新の紋納。其
 縮緬。龍紋。と外紙類。出た。同古信支那。
 此所文多。摺の所。は旧跡也。此處白菊。ら。碑
 を。同古信。會。は。古。安積山の井。の
 古歌よ。

安積山の井。は。古。の。井。は。古。の。井。
 同國少。を。古。の。井。は。古。の。井。
 音。あり。の。井。は。古。の。井。は。古。の。井。
 成。り。の。井。は。古。の。井。は。古。の。井。

○同國阿武隈川。比所白川の関と云。舊跡也。
関山親音あり。白河の関古舟多し。

使河の人の言に、昔は白河の関は、
東海の人よとて、白河の言も、
都は、鹿も、此の山、
白川の言

○同國金澤領飯豊山。四里程登りし。山中
塩出あり。官より、鹹と焼塩と云
買ふ也。

出羽國飽海郡。庄内領上野決村。地は村。清水

村。比ニヶ村。山より清水出あり。比水は交りて
焼米流し出あり。比道は石碧出あり。又前灘
石と云出あり。俗に神の矢は根と云

○同國多海山。日本よ比の高山也。麓は村と云
山上を道法六里余と。四里程登りて。古来は
比素と云に雪消と云と。誠は雪を落すと云
し。山の言と云。享保六、辛丑年、田七月朔。
此山へ光り。午に刻山の六七分より。比頻と云風
雨多し。山鳴り。谷響り。砂石を飛。風面を搏

紀居動静の如く。雨巖と流ひく。あまの
谷より落ちる水の瀧の如く。山中より方々を望む
の湖水あり。山のたれも異國をゆく。遠くより
浪多き荒海也。斯く浪の深きを。危難は達
し。夏は減りし死は一生と得る。平谷へ吹流
さる。其所より流る。流るは流る人なり。こ
外物人未だ。こもり方沢知れども。あまの
風雨せんとおぼくして。勝事と解き。あまの
引算。あまの力に引くと取算。あまの影おとる。朝
人參りあり。はる含む。漸く氣力を補ひ。被風を
凌ぐ。此は懐中の品。こもり用をふり打捨。心中
に日域大小の神祇。又平日尊敬の御名と。此
誠は露命の風前の燈なり。唯死は初
よして。此事あり。翌二日はおぼく風止。因
日未の刻と一向を食む。案内志し。此
山に若くは後。忘れ。万死と出く。一生にあり。此
所山乃半腹より上。の窪まりあり。此
内傾。若くは郷伊賀守。此分境なり。此

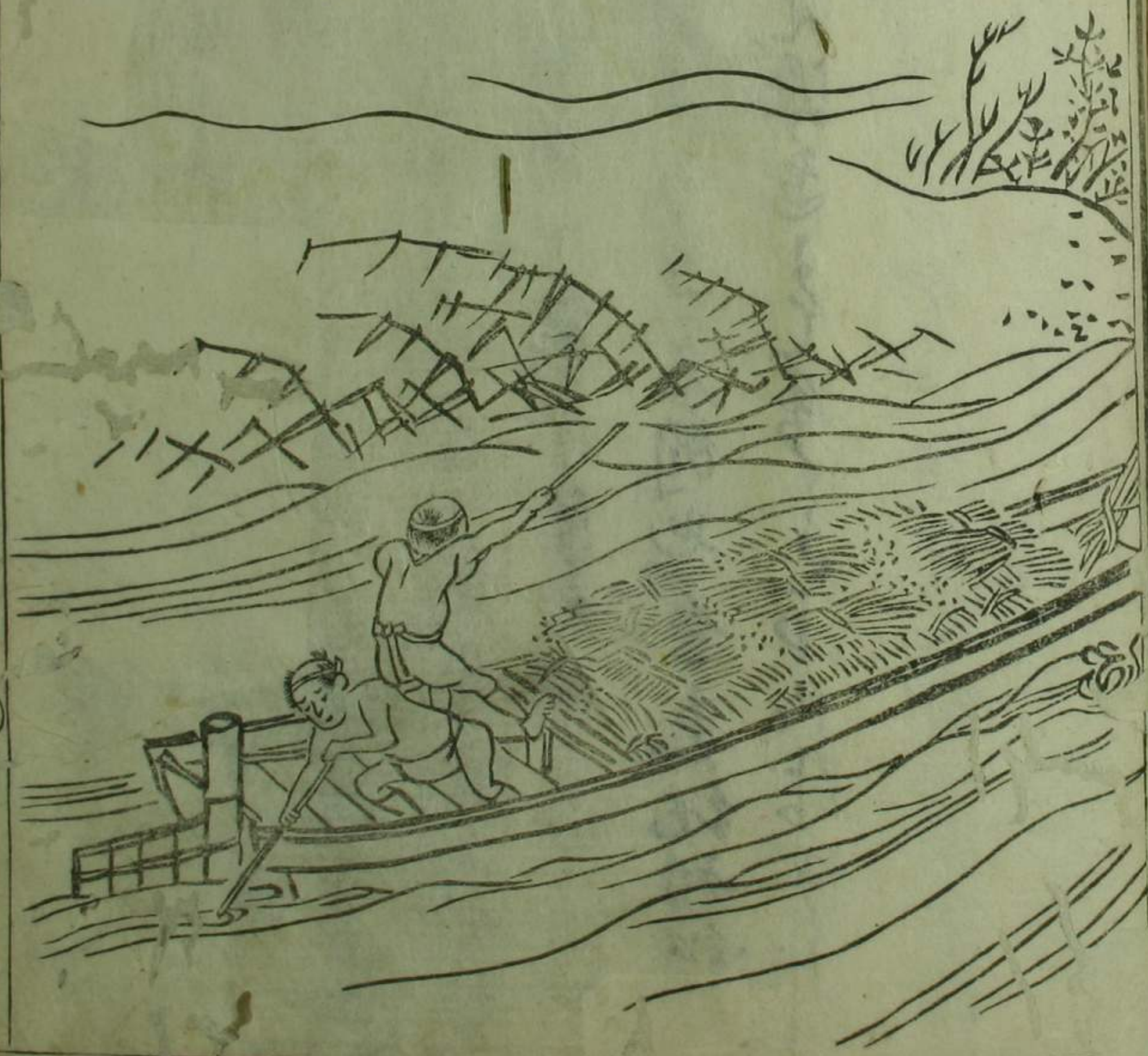
清辨集卷之三
一五

の役人々只ホ大勢に連事。是前二の山へ登り
しる古の人数。却令武百人斗も有り。に是数
くまらる。人丈ホの内よ、怪人多く。即死
は者少く遊て糸巻も、あぐ上下恙可。是
編に 公用の涉路と云。大小の津派も憐と云
まの誠よ 御恩澤身は條正。冠有奉心肝
よ徹と。六郷伊賀守願分内。臨裁村と云。而も
沿く山止へ人吏又白粥の飯の物と云。りせく
あり。以て日卯の別は食事。は僅と云。此時

御もく、御もく 飢餓と云。又より彼
臨裁村の勢運あり。山に捨てし。所の懐中乃
所。と公用具ホ。被方けり。尋、水先。りりり
取集先来り。荷物ホも谷よ。まらび。岩角よ
あ。皆崩進。若類其外。白に濡し
一向用立。不考あり。此雨もく。品も新よ。扱く
公用と云。郷民の云七八。拾年以來。あけの
大風雨ハ。少も傳つ。と。去。朔日。山。こ。こ
り比。折の者。ハ。一。あり。け。不。同。風。吹。出。と。云

新編卷之三

羽
鳥
海
山



新編卷之三



有るにや。整及人の臣等。中河へ至。御と雖。御の
美はりのありしに。山一光王。是危難の所。御
海へ登り。登ると下り。お物。前後。二日。和
又。御とせ。山へ登り。ま。海府の後。高。敬の神。此
に。活。彼。報恩。と。謝。し。ま。る。

○同國象。海名。よ。ま。ま。と。名。所。也。京。色。純。列。和。哥
の。浦。又。似。る。ん。海。道。ま。え。活。く。ん。山。森。有。り。も
不。く。有。大。概。は。不。を。里。心。方。斗。も。有。り。と。も。多。く。
古。歌。多。く。

世中はく。この。経。り。御。海。や。あ。ま。り。と。の。山。名。有。り。と。く
よ。ま。ま。の。海。名。や。の。山。名。有。り。と。く。又。好。ま。る。海。名
は。の。山。名。有。り。

○同。月。山。の。麓。志。津。村。は。麓。也。夫。古。湯。殿
山。一。所。淨。古。口。六。指。口。里。裁。と。云。六。町。を。里。也。此
所。を。裁。と。く。紫。東。小。屋。名。ま。る。衣服。改。更。
金。銀。鑽。其。介。所。持。の。品。伏。け。不。く。は。ま。る。是。より。先
の。後。子。人。は。活。々。と。ま。る。禁。火。道。の。傍。又。ま。る。
淡。砂。の。ま。る。と。ま。る。と。ま。る。と。ま。る。と。ま。る。と。ま。る。と。ま。る。と。ま。る。

奇蹟

奇蹟

七

改削。羽黒山。壯麗な場所。何もの山道。人難し。牛の
首と云ふ。石地蔵有。海邊に根上人参。こまに
蚕休有。羽黒山道。荒決。常火堂あり。紀別。熊
野山。同。高。此山。は。大日本。三ヶ所。火と云。如何成
成。よ。こ。由。来。と。知。り。羽黒山。よ。と。云。た。り。
御宮有。法社科。千五百名。法別。萬願寺。家上
川名。所。あり。古。寺。多。し。

家上。川。登。れ。と。る。船。舟。乃。り。つ。る。と。ん。は。此。背。月。と。り
り。川。の。舟。に。あ。り。船。舟。の。光。は。ん。と。る。星。の。ま。は。り

○ 羽別。奥。羽。よ。て。一。鐵。百。文。は。通。用。長。百。と。有。ゆ。り。一。
羽。別。よ。下。と。折。柄。米。穀。を。賣。り。つ。る。一。一。米。を。米。
の。價。拾。五。文。と。り。き。田。畑。甚。廣。大。と。り。一。苗。代
場所。又。水。付。け。田。地。の。出。入。方。子。宜。い。依。り。地。と
休。む。と。云。て。空。田。所。と。り。一。又。此。國。の。米。葉。よ
賣。女。の。事。と。り。一。と。り。一。と。り。一。
丹。後。國。大。江。山。麓。よ。茶。屋。を。賣。り。一。一。猿。ヶ。馬。場。越。と
云。大。江。山。へ。光。り。千。丈。の。滝。と。り。一。一。と。り。一。一。と。り。一。
見。ゆ。り。二。三。に。落。る。滝。と。り。一。一。と。り。一。一。と。り。一。一。と。り。一。

丹後國大江山麓

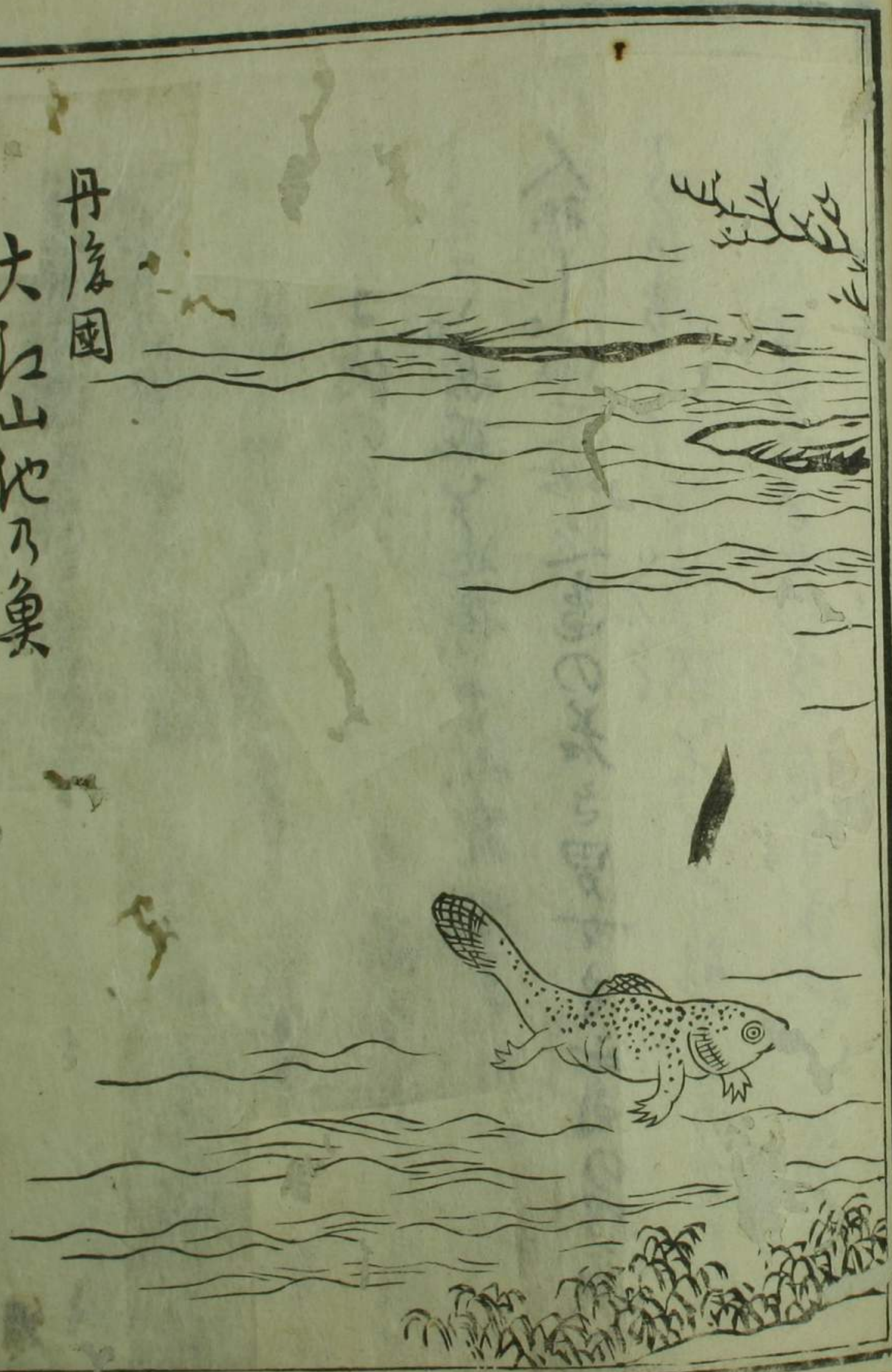
丹後國大江山麓

と云ふ事難家。其方後より人あり。此の今に佛性寺
村あり。人あり。池よゴニウトウ又セウズトウと云
魚有。其形山排魚に似たり。又池有。其形
方從河上。此邊馬場の跡あり。是より大
江山上迄を望む。此所芝原也。其よりす所從
胎へ心。鬼の城と云ふ有。昔に鬼も住へしと
云ふ。其より今に石垣あり。穴藏あり。其
と云ふ。予此穴の由一説に留入込あり。奥乃
方ハ石崩也。此の由一説に留入込あり。童蒙の説

遠も有。其の由一説に留入込あり。童蒙の説
鬼の城の名あり。其の由一説に留入込あり。童蒙の説
○同國中長村也。山莊大夫の古墳あり。其の由一説に留入込あり。童蒙の説
有。大サキ丈七尺あり。從り。此邊は安壽村也。
陸焼濱。山莊大夫の古墳あり。又此の由一説に留入込あり。童蒙の説
り。落川あり。國分寺村也。竹江山の麓に
ある。其の由一説に留入込あり。童蒙の説
り。其の由一説に留入込あり。童蒙の説

奇亦未

丹後國
大江山池乃魚



諸國津山は本化境と云ゆ有。二月辰未は。此は不
 の業は後世と云る多し。けしは右の如く。と里方
 へ賣り出が所。山路をて男に引あは。櫻りよ
 彼男戯をわして交會するもの。男如く。事と
 おもは。他の人へ多く引く。若きと引く。山
 とく。其下と追拂。山麓に控ま。あは。誰子
 人那。依て世近急の若き男女多。その如く。山
 の山路は行軍。淫樂と行り。故。この交を
 多。男の方から女の方へ。白。子。一。

又女の方から多。女と男の。一。は。を。
 市に。交會と。山。寺。
 風俗。色。目。別。の。事。の。多。中。は。情。態。
 止。事。定。の。理。一。也。飲。食。男。女。ハ
 人の大欲。多。と。云。も。是。の。如。く。
 右諸國巡行の如。享保年中。中。寶曆二癸酉年
 迄。同。断。多。勤。仕。奉。事。中。二十。年。の。余。併。世。の
 深。御。惠。多。り。也。農。民。推。吏

奇跡卷之三

三十三

命と取を^{けくま}と。諸王巡^{ちん}り^りす^りの^り抄年^りと^り及^りり。その
 草木の事。及び^{けい}鑑^り磨^りと^り山海^り彈^り路^りの事^りと。
 委^りく^り書^り記^りし。九卷^りと^り。諸^り別^り採^り藥^り記^りと^り名^り付
 て^りも^り。こ^りと^り後^り卷^り抄^り繁^り多^りる^り心^り造^り為^り事^り斗^りと
 して^り免^り就^りと^り事^り志^りり^り

本朝奇蹟談卷之下終

安永三年

午二月吉日

書林

江戸日本橋通南二丁目
 野田七之場
 大坂心齋橋小橋
 和泉屋卯之場
 京市所通三條下町
 榮屋安之場
 月四条通東同院西入所
 村上治之場

